

戦争と我國民の使命

文學士 深 作 安 文

今晚は此席で、お話をいたす事になりましたのは、私に取つて、誠に光榮の至りであります、題は先日、加藤博士に申上げて置きました「戦争と我國民の使命」と云ふのであります、前以て御斷りをせなければならぬのは、私は元來、戦争に就ては、専門に研究をいした譯でなく、只新聞、雜誌等に傳へられましたものを、材料として、聊か愚見を由上げるのでありますから、此の方面の専門の御方には、或は非常に滑稽に聞える點もありませうが、此邊の所はどうか、充分に御批評を願ひ度いのであります。

先づ戦争は、如何なるものであるかといふことから申しますと、凡そ人間の活動には種々ありまして政治、學術、經濟、宗教、道德等何れも中々大きな活動でありますが、戦争ほど大きな活動はなく、又其の結果影響の直接なものはないと思ひます、と申すはそれは直に國家の盛衰興亡に關係して來るからであります、此の戦争は、政治の上からも外交の上からも、又法律、經濟等の上からも或は宗教、教育等の上からもそれ／＼考察する事が出來ると思ひますが、私は平生殊に倫理、道德の方面に興味を有して居るものでありますから、此の方面から、戦争を考察して見度いと思ふのであります、さて戦争に

二つの意味があります、第一は、廣義のものでありまして單に人類に限らず動物にもあるものであります、即ち蟻や蜂の生活を見ましても、中々複雑な戦争があるやうであります、人類の方で申す所の近衛兵のやうなもの、工兵、斥候のやうなものがあつて、それぞれ其の役目に服して居るのであります、又鳥類の中で例へば鳥などには、矢張り此の意味の戦争はあります、就いては凡そ、動物が自己の生存欲を充たす爲に同類なり、他の動物なりを倒すことが戦争であるとしたならば、戦争は動物界にも亦存するのであります、狼虎豹等のやうに、爪や牙を有つて居るものに至りましては戦争と名づけて一層適切なものでもあります、第二は狹義に於ける戦争であつて、人間のみに限られて居て、武器も整頓し、戦術戦略も複雑なもので、且つ中には非常に大規模のものがあります、今日の歐洲大戦亂には、一千万人の兵士が参加し、八千萬噸以上の軍艦が活動し、陸に於ても、海に於ても、空中に於ても、水中に於ても、それ相當の武器を以て、戦鬪行爲が進行して居るのであります、唯今申しましたいは、戦争の定義は、この人類の戦争にも、矢張り當て嵌まるのであります、即ち人類の戦争なるものも、亦その生存欲を充たす爲に、敵を倒すといふことに外ならないのであります、考へて見れば實に奇妙なことであります、個人が殺人行爲をなすときは、國家は直に之を嚴罰に處するのであります、戦争といふ國民の殺人行爲は之を罰するどころか、勳章、爵位、其他の榮典を以て酬いられ單に現代が之を稱讃する許りでなく、歴史家は、其の顛末を叙述して歴史を編み、以て之を子孫後世に傳へるのであります、

古今に論なく、中外を問はず、社會、國家にあつて、人の尊敬する所となる階級の人々の過半は何れも戦争に携つて、偉名を奏した者であります、殊に古代に於ては、戦陣の最勇者が君主にもなり、祭祀の長にもなつたのであります、是に由つて之を見れば、戦争は之を道理の側から考へて見ますれば、極めて不條理なものでありまして、此を満足に解釋するには果して如何にすべきかと云ふ問題も自から起つて參るのであります、若し今晚の御漸が之に向ても幾分役立つ所がありますれば、私に取つて實に満足な次第であります。

次に戦争の種類に就いて申しますと、戦争の起る理由は、一見單純の様に見えるものが少くないのであります、實際は、中々複雑な理由から生ずるものが多いのであります、古代に於ては、戦争は主として、一國の君主が、何か感情を害して、其の腹癒せの爲に或は功名心を充足しようとして、他國の領土を侵略する所に起るものでありましたが、段々と時勢の進歩につれて戦争は、單に君主一人の意志のみによつて、起るのではなく、種々複雑な理由が加はつて參りましたのであります、私は之を分けまして第一政治上の理由から起るものと致します、これは更に別ちまして、(一)國內に生ずるものがあります例へば野心家が現はれて、時の政府の顛覆を企てて起す戦争の如きは即ちこれでありまして、我國ではかの西南の役の如きは、此の種類に屬するものであります、(二)は外國に向つて起すものであります例へば他國の領土を獲得するものであります、彼の露國のピョートル大帝の侵略主義實行の戦争の如

き即ち是れであります、第二は宗教上の理由から起るものであつて、一の宗教を信するものが、他の宗教を信するものに對して起す戦争であります、かの十字軍は之が適例であります、又日本では、天草の亂の如き、先づ茲に數へてよいのでありませう。第三は人種的反感が其の原因をなすものであります、これは或る人種が、他の人種に對して、輕侮或は嫌厭の情を懷くところから起るもので、白哲人種と有色人種との戦争の如き即ち是れであります、尤も白哲人種同士でも起すことがあります、今回のスラヴ族とチャーマン族との戦争の如き即ち是れであります、第四は經濟上の理由によつて起るものであります、文明の程度は低い、が、物産に富んで居る國があるといふと、他の強國は之を併呑しようとして戦を開くことがあります、英國の印度を取つた場合の如き、又同じく英國がトランスバールを併せた場合の如き何れも其の例であります、第五は復讐の爲に起す戦争で、一旦打敗られた國民が長い年月の間、いはゆる臥薪嘗膽の苦を忍んで、以前の復讐を致す戦争であります、かの普佛戦争の如きは、これに屬するもので、プロシアは、ナポレオンの蹂躪に對する恨を報いる爲に起したのであります、第六は同盟の義務の遂行より起す戦争であります、今度の我國は英國に對して同盟の義務を果すが爲に、膠州灣を攻撃するに至つた如き、この例であります、之を要するに、戦争は上述の如く、種々複雑な理由から起るものであります。

次に戦争の效果に就て申上げて見ませう、言ふ迄もなく、戦争は悲惨極るもので、最厭ふべきもので

あります、凡そ生きとし生けるものは、たとひ一時間でも半時間でも、否一分、一秒でも、長く生きようとするものであります、殊に人類にあつては、この生存欲は最も複雑に働くのであります、これをば根本的に撲滅して顧みないものは即ち戦争であります、否、個人の生命の撲滅のみではありません。一國或は數國の生存をも危うするものであります、就ては世にこれほど悲惨なものと云ふはありません又之を經濟上により見ましても大に厭ふべきものであります、今度の大戦争に於ける、一日の費用は一億三千萬圓乃至一億五千萬圓であると云つてをります、或る新聞の漫畫に、砂利を積むやうな車に黄金を満載して、之を底知れぬ谷底に落とし込む圖がありました、戦争の不經濟であることを示すには面白い趣向である、それ故、戦争は餘程、熟考の上ならでは、容易に斷行すべきものでないであります、故乃木大將の書置かれたものの中に、「熟慮斷行」といふ文字がありますさうであります、此の句こそは、戦争に就て、殊に適切な意味のもののように思はれます、かく考へて來ますといふと、戦争は、人類に對して全く、惡結果をのみ齎すもののように思はれますが、又好い結果も少くはありません先づ其の主なるものを申せば、(一)戦争は、國民の試験であります、言ふ迄もなく、今日は小學校から大學に至るまで、學生の試験を致しますが、戦争はいはゞ國民の實力を試めす試験の様なものであります、平生、周到な注意の下に十分に準備を整へた國民は、戦争の際に於て、一般に良好な成績を得るのであります、之に反して、準備の不十分な國民は視面に不結果を見るのであります、それ故、戦争は必らず國民の心

を緊張せしめ、覺醒せしむるものであります。固より平時に於ても、政治、宗教、道徳、教育等によつて、相當の刺激は國民に與へられるのであります。是等は到底戦争ほど、強烈である事は、先づ不可能であります。(二)戦争は國民をして心の奥底から自覺させます。戦争によつて國民は物質的並に精神的の長所、短所を明かに認知するのであります。一たび戦争にして開始せられますといふと、艦船、兵器、糧食、彈藥等は論なく、戰略、戰術等に關して、又兵士の訓練、國民の意氣等に關して其の長短得失が明瞭に曝露されるのであります。従つてこれまで、さほど自國の長所と思はなかつたことが、戦争によつて案外大なる長所たることが分る事などもあります。専門の御方に向つては如何かと存じますが、承る所によりますと、突撃といふことは我が國の兵士の獨特の長技でありますさうで、先般膠州灣に於ける敵兵の我に對する突撃は我れを眞似たものであるとのことであります。そこで或る新聞は評して、「問屋に押賣り」と云つてをります。或る方の説に此の突撃といふことは豊太閤の朝鮮征伐の際加藤清正の實行したところでありますが、實際何んなものでありませうか、又獨逸が、今度の戦争に於て、白耳義のブラッセルを攻撃するに方つて用ゐました、四十二センチの重砲は、旅順攻撃の際に於ける、我日本軍の重砲を用ゐたことを模倣したのだと、傳へられて居るやうであります。又この度ロシアで禁酒令を發して國民特に兵士が火酒を飲むことを嚴禁し好結果を收めつゝあるを云ひますが、これも、亦日露戦争の際、我軍が致したことに基づいたのだと云ふ事であります。(三)戦争は人心の腐敗を防ぐ大

清潔法であります、平和は勿論、結構のことではありますがこれが長く続きますと、兎角心が弛んで来て、奢侈、贅澤となり、墮落腐敗に傾くものであります、此の弊害を一掃するには、戦争が最も有效なるものであります、戦争が起りますといふと人民の心が緊張し、各自、心から覺醒して眞面目となつて來ます、國民はこの清潔法によつて始めて堅實な生活に立廻ることが出来るのであります、かかることは、戦争以外には、到底、期待し得ないことと思ひます、(四)従つて戦争は國民に向つて道徳的訓練を加へるものであります、即ち人民の服従心、協同心を養ひ、自制、克己の念を強くし、義務的精神、犠牲的精神を盛ならしめます、これ亦平生、平和の時には望まれないことでもあります、我國でかの鎌倉時代、又は元龜、天正時代、若くは南北朝時代に立派な武士の輩出しましたのも、全く戦争の道徳的陶冶の結果であると思はれます、(五)最後に戦争は、醫學、科學、工業、美術、文學等の進歩を促すものである、戦時には或は戦地に於て又或は内地に於て傷病兵の手當てをなす所から、自然、醫術殊に外科術の進歩を促し、又要塞堡壘を始め、兵器、彈藥、軍艦等を造ることによつて、科學、工藝の發達を來します、又戦場の勇將を或は描き或は歌ふところから美術や文學の興隆を促します、波斯戦争の結果、希臘の美しい文學が生れ出で、源平の亂によつて、平家物語とか、源平盛衰記とか立派な文學が現はれたのであります、かく考へて來ますといふと、戦争は種々有益な効果を生ずる事が分ります。

進んで戦争が、社會に害毒を流す方面を見て見ませう、(一)戦争は、人民を撲滅し、國家を滅亡せし

める、戦争の悲惨極まるものであることは已に述べた通りであります、個人の場合におきまして、若し其の人が何のやうな大天才でありまして、一たび戦争で命を失へば、其の天晴な才能、技倆といふものは少しも發揮せられないで永久に葬り去られて了ふのであります、(一)戦争は人をして其の蠻性を暴露させる、今回の大戦争に際し、文明人中の文明人を以て自ら任じた獨逸人の蠻行は實に全世界の人民をして、驚殺させて居るとは改めて申す迄もないのであります、白耳義の或所では、老婆が針を手に持った儘獨逸の爲めに殺されたと云ひます、一人の老婆の存否が如何に獨軍の勝敗に影響するでありませうか、凡そ残忍、獐猛、貪慾、驕慢、虚偽、強迫、姦淫等、あらゆる一切の醜惡な文字は戦争の爲めに、存するやうにも思はれるのであります、(二)戦争は美術品、建築物等を破壊する、美術品といひ、建築物といひ、その美しいもの貴しいものに至ては、何れも其道の天才、技術家によつて造られたものであつて、文明の裝飾として、將た娛樂、教化の要具として、極めて大切なものであります、一たび亂暴な軍勢に會つては又其の殘骸をすら留めないものであります、(三)戦争は、文明の要素たる道德、教育、法律、宗教等の權威を蹂躪するものである、如何に教師が學校で道德を説いても、又如何に法律家が、法の尊嚴なる所以を説示しても、又如何に牧師が教會で神の功德を讚嘆致しても、戦争によつて此等の努力は、悉く破壊されて了ふのであります、道德も、教育も、法律も、宗教も、戦争の前には只沈黙を守る外はないのであります、(五)戦争は個人なり國家なりの經濟を紊亂します、一國の壯丁が募に應じ

て戰場に赴くといふとは經濟界に取つて大なる打撃であります、田島は荒れるに委せ、工場は鎖され店舖は之を閉つる外はないからであります、又鐵道なり船舶なり凡て交通運輸の機關は或は軍隊輸送の爲め、或は敵の破壊、拿捕の爲め、非常の妨害を受け商工業は萎靡振はないことになるのであります。是等は何れも戦争の人類に齎らす害悪であります。

然らば、此の様な戦争は、將來、永く存するでありませうか、若くは之を廢止することが出来るでありませうか、之れに就て、述べなければなりません、平和主義は、夙に歐米諸國に起つて、近來、我國にも、盛に宣傳されてゐます、かのヘーグにて開かれる萬國平和會議は、實際、世界の平和を維持するに足るものでありませうか、今日の大戦亂は此間に「否」と答へて餘りあるのであります、ヘーグの平和宮殿は米國の富豪カーネギーの寄附によつて出来た大建築であります、或る新聞はこれに大きな貸屋の札を斜めに貼り付けたところを掲げました、これは戦争の廢止の殆んど不可能であることを示すに頗る適切な諷刺畫だと思ひます、私は以下述べます所の諸理由の爲に、戦争の廢止は到底覺束なからうと思ひます、(一)前に申したやうに、人間は生存欲が盛んなものであります、國家が斯様な人民から成立つ限り、戦争は、之を廢することが極めて六かしいのであります、元來生存欲の存在は獨り人間のみならず、動植物におきまして、著しい事實であります、植物が日光の當る方に枝葉を伸ばす所の向日性も、又出来るだけ廣く地中に根を張る所の向土性も要するに、その生存欲を充たす爲めであり

ます、動物に於ても、その出来るだけ快に就き苦を避けようとするのは之が爲めであることは云ふ迄もありません、人間に於ては此の生存欲は、先づ主として、衣食住の三者に向つて働くのであります、然るに是等三者の材料は、到底無盡藏たることは出来ないで、必らず限界のあるものであります、如何程殖産興業が行はれ百工技藝が興つて、之が材料を増加しましても、世界人口の著しい増殖につれて、衣食住に缺乏を生ずるとは、止むを得ないこと、云はねばなりません、すれば、茲にいはゆる生活難の生ずるのは、當然の結果であります、又假令、何等かの方法で、此等物質的欲望が充たされるとしましても、人間の精神的欲望は、續いて起つて來ます、中にも名譽と權力とは政治家でも、學者でも軍人でも實業家でも何れも之を得ようと力めるものもあります、生存競争なるものは、かくして一日も絶えることがないのであります、此の競争が國民の間で益々激烈となり、遂にその頂點に達すれば茲に、戦争の開始を見るのであります、(一)經濟的方面から見ましても、同一結論に歸着します、文明が進むにつれて、製造工藝が盛になり、其の製作品は之を海外に運んで賣捌く必要が起ります、之が爲には、勢ひ通商貿易を保護する兵備を要する事となります、今日歐洲の文明國特に英獨の二國が競つて軍備を擴張し、中にも海軍を盛んにした結果、遂に今日の大亂を起すやうになつたとは一般に風評する所であります、(二)人種的理由から見ましても亦同じ事であります、此度の歐洲の戦争はゲルマン民族と、スラヴ民族との衝突、ラテン民族と、ゲルマン民族との衝突と見られるのであります、今日世界各國はそれ

ぞれ自己の民族の發展を圖る事を怠らないのでありまして、己と同じ人種の國民を語らつて異人種の國民に當つて居るのであります、彼の米國に於ける日本人排斥は要するに之が爲めであります、言ふ迄もなく英國は我れの同盟國でありますが其領土たるオーストラリアには、「我國人の移住を許してはならぬ」と同國のハミルトン中將は主張してをります。」

世界近世の歴史を見て見ますと、平和の時よりか戦争の時が長いやうな心地が致します、即ち戦争が普通の状態で、平和は却て變つた状態の様に思はれます、試に日清戦争以來、今日まで約二十ヶ年の間を見ますと、世界で主なる戦争が前後九回あります、(一)希土戦争、(二)米西戦争、(三)英杜戦争、(四)團匪事件、(五)日露戦争、(六)支那革命戦争、(七)伊土戦争、(八)バルカン戦争、(九)今日の大戦争即ち之であります、就ては戦争を常態とし、平和を變態とする考が出るのも、一應最もな事だと思ふのであります、昨今人の持論して居ります英國のノルマン、エンヂェルといふ人の著書「大幻想」の中に、彼の魯佛戦争の時の大戦略家モルトケ將軍(今日の獨逸の參謀總長モルトケ將軍の叔父)がブルンチエリーに宛てた書面の中の句が引用してあります、それは「永久の平和は夢想である、而かも、それは美しい夢想でない、戦争は神の打建てた世界秩序の一要素である」といふのであります、これは勿論、軍人の口から出た議論であります、参考の値打はあると思ひます、そもく進化といふことは一般生物を支配する通則でありまして、總ての生物は、この法則に支配されて居るのであります、今試に一段の

高處に登つて考へて見ますと、戦争は吾々人類をしてこの進化を遂げさせる一の方法であるやうに思はれます、戦争に於て、最後の勝利を得るものは、先づ智能も進み、そして平時の準備や訓練も行き届いた國民であるに相違ありません、前に申しました様に戦争の効果には人生に有害なものもありますが、確に有益なものもありまして、戦争の爲めに人類の文明は、一轉進をなし、新しい内容を具へて、人類生活の改善を促がす場合があると思はれます、前に申したやうに若し世の中に永く平和が続くといひますと、種々の病弊を讓すことになりまして人類の進歩は阻害されて來るのであります、さるを戦争がありまして、凡ての點で優強なる者が存続し、凡ての點で劣弱なる者が衰滅して、其の結果、全體としての人類の進化を來たすのではないかと思はれます、吾々に精神があつて、吾々の一切の生活を支配するやうに、此の世界にも亦大なる精神があつて、森羅萬象を成立させるものと思ふ、そしてこの大精神は自らを發展し、開展させる爲に植物、動物、人類等に向つてそれ／＼相當の活動を命じ、その結果として、競争が起り戦争が起るのではありますまいか、獨逸の大思想家の一人であるヘトゲルは、其の國民が或る時期に著しい發展を遂げるのは、世界精神が、丁度その時に自己を開展するものであると考へて居ります、同じく獨逸の哲學者で有名な、シヨールペンハウエルは、世界の實在は意志である、この實在は生物に於ては「生きむとする意志」として現じて種々の欲求の源となつて居ると説いて居ります、是等の思想を本として考へて見ますれば、戦争には一個深遠な意味、申さば哲學的意義があるやうに思は

れます、就ては人生と戦争とはその間に密接不離の關係があると申さねばなりません。

そこで私は自然と我國民の使命に就て述べる順序となりました、戦争は前に申しました如く、甚大の害惡を伴ふものでありますれば、濫に之を行ふべきでない、唯、若し之を回避しますれば自國の權利を侵害され、國家の存立を危殆ならしめるといふ様な場合には進んで之を決行せねばなりません、此の場合に於ける戦争こそは眞に正當な意味に於ける戦争であります、いはゆる「義戰」といふべきであります。

又傍若無人の民族がありまして少しも他國の利害を念とせず、専ら自國の利益をのみこれ圖り、干戈に訴へて迄も其の利己主義を實行しようとするときは、憤然立つて之に反抗しこの暴亂な民族を膺懲すべきであります、是れ正義人道を擁護する所以に外ならないのであります、若しいひ得べくんば、これは道徳的義戰といふべきであります、若し世に斯様な義俠的な國民があるとしますれば、それこそは偉大な國民であつて世界人類の爲に眞の福祉を招徠するものと云はねばなりません、果してかかる國民が現在、世界にあるでありませうか、私は少くとも、我が日本國民はこれに近い國民であると云ひ度いのであります、我が國民は物質的文明の側を檢しますと、未だ西洋諸國に及ばない點が澤山あります、會て、故乃木大將が？ 宮殿下の御伴をして、英國王の戴冠式に參列され、歸途歐洲諸國を巡歴して、歸朝されました時、大學の或る會合で御出を願ひまして、一場の御談を承はりました、其の御談の中に「私は今回歐洲を巡回して感じた事があります、人能く我國は一等國になつたといひますが、私にはどの點

を見て、我國が一等國となつたとは思はれません、吾々は用心して、西洋人の追従などを眞に受けて得意になるやうなことがあつてはなりません」といふやうな訓戒がありました、此の事は何人も肝に銘じて忘るまじきこと、思ふのであります、けれども畏くも明治天皇の御葬儀の際には多くの締盟國は或は皇族をして或は大使、公使をして、葬場殿に参列させました事は何方も御記憶のことでありませうがこれは西洋の一等國間の國際的禮儀と承つて居ります、然らばこれは我國が世界の一等國の班に入つたことを物語る何よりの證據であると思はれます、然し此事實と乃木大將の訓言とは決して矛盾致しません、と申すは我國が一等國となつたのはほんに皮相のこと、外觀のことでありまして、一たび其の内容實質を調べて見ますれば故將軍の訓言の決して人を誣ふるものでないことが分るのであります、例へば經濟の點を考へて見ましても政治や社會制度の點を見ましても、亦思想學問の點を調べましても、また我國は西洋先進國と肩を比べるといふことは實際出来ません、けれども茲に大に人意を強うするに足るものがあります、それは我が國民が常に正義、人道を尊重することでありまして、私は此事許りは我國民が西洋諸國民に對して、確に一日の長であると信じて居ります、古來、我國の武士は「武士の情」と申しまして、殘虐非道なことは深く戒めて致しませんかつた、所がこのことは次第に國民一般の性情に編込まれるやうになりました、正義、人道の尊重は國民的美點となつたのであります。

此の美點は現に此の度の青島の戦争に於ても、遺憾なく發揮せられたのでありまして、軍規峻嚴、士

卒は秋毫も犯さず、敵に對して殘忍暴戾な行爲の如きは微塵もなく、一旦ワルデック總督の降りますや、畏くも雲上におかせられましたは武士の面目を重んじて、帶劍を御許しになつたのであります、又古くは彼の大楠公が金剛山に寄手塚、味方塚を築いて敵味方の別なく、丁寧な戦死者を埋葬したことの如き小楠公が渡邊川に溺れた敵兵を救ひ上げて衣食を給し、藥馬までも與へたことの如き、謙信が信玄に鹽を贈つたことの如き、これ何れも武士道の精華であつて、永く國史に光りを放つて居ります。

此事は明治の御代になつて、一層行はれたのでありまして、例へば西南の役には敵味方共同の救護所を設け、これが後に博愛社となり、赤十字社となりました、又日清の役、丁汝昌の毒を仰いで死にますや、我伊東提督は其の屍を軍艦で送らしめました、旅順の役、敵將スラッセルの降るや畏くも先帝陛下には武士の面目を重んじて帶劍の儘、開城を許させ給ひました、又聞くが如くんば、日露戦争の際、我國の敵に對する態度は國際法の改善を促す動機となつたといふことであります、西洋では該戦争まではレシプロシテ (Reciprocity) といふことが、一般に是認せられて居りました、これは「報復」とでも譯しますか、若し先方が暴力を以て我に向つて來ますれば、當方でも、亦暴力を以て之に向ふことであります、處が、日露戦争の時我宣戰の詔書には、「國際條規ノ範圍ニ於テ一切ノ手段ヲ盡ス」といふ御言葉が御座いまして、斷じて殘忍亂暴な所業を御許しにならなかつたのであります、これが我軍規の森嚴なる根本理由であります、環視の列國が之を見て嘆稱措かず、遂に此事が戦時に國際法の一條文となるやう

になつたさうであります、(因に以上の御言葉は今回の獨逸に對する宣戰の詔書にも亦御座います)斯の様な我れの道徳的特徴は之を人道的に考へて見まして、實に立派な誇りでありまして、我國は此の點で世界に模範を示すといふことは、決して自分よかりの空想ではありません、之を獨逸國の極端な軍國主義によつて、世界の統一を夢むるやうなことに比べますれば、其差は實に霄壤も帯ならずであります、若し道徳的世界救濟といふ言葉を用ゐることが出来るならば、我國民は道徳的世界救濟を試みる資格を有つて居るものと思はれます、此の世界的偉業を實行する爲めには、勿論相當の兵力を要するのであります、といふのは此の計畫を妨害する國民は之を推倒して進まねばならないからであります、此の意味に於ける軍備擴張は當然之を實行すべきことと考へます、そして又此が爲めに行ふ戦争は、これ正しく戦争の道徳的意義、哲學的意義を發揮する所以のものと思はれます、畏くも教育に關する勅語に、「之ヲ古今ニ通シテ謬ラズ之ヲ中外ニ施シテ悖ラズ」といふ御言葉が御座いますが、上述の愚見は恐多いこととありますが、或はこの御趣意にも副へ奉つることが出来はしますまいかと恐察せられます、何故なれば、如上の日本道徳は之を擴充して、世界に推及ぼしても、少しも差支がないからであります、小にしては、日本道徳、大にしては世界道徳、兩者は二にして一、一にして二、決して悖戾する處が無いのであります、以上の事はこれ我國民の道徳的使命であつて、我々は一意専心、之が遂行に努力すべきものと信するのであります、これで今晚は失禮致します。(完)